

西藤島小だより



☆学校教育目標『自主と創意に満ちた人間性豊かな児童の育成』

☆目指す児童像「学ぶ子」「やさしい子」「強い子」

福井市三郎丸1丁目1410 TEL (0776) 22-8820 FAX (0776) 22-6809

<http://www.fukui-city.ed.jp/ni-fuji-e/> E-mail: ni-fu-re@fukui-city.ed.jp

平成29年11月30日発行

No.7

福井市西藤島小学校

西藤島小の伝統 ～委員会紹介～

11月16日(木)に、2学期の新しいメンバーでの委員会紹介の集会を行いました。本校には、にじっ子(生活) 元気UP(体育・集会) ニュース(放送) すくすくハート(保健) 愛SO(環境) おいしんぼ(給食) BOOKBOOK(図書) チャボ フラワー(飼育・花壇) の8つの委員会があります。集会当日、どの委員会も自分たちの役割、他の児童に守ってもらいたいお願いなどを、楽しいパフォーマンスを交えながら、元気いっばいの声で紹介していました。



私は、この集会の練習の様子を、前日の6限目に体育館でしているところを偶然見かけました。練習の後、担当の先生から、発表に向けての指導を受けた後、その日が1ヶ月間の教育実習最終日だった本校の卒業生、羽田野先生に感想を述べてもらいました。

「僕が5年生の時、初めて西藤島小の委員会に入ったのは今から10年前です。その時の委員会がそのままこの10年間引き継がれていることに驚きました。僕が1年生だった頃も同じような活動でした。このようにして西藤島小の伝統が受け継がれていくんだなあ実感しました・・・」

彼にしか述べられない感想でした。そして、改めて西藤島小を築いていってくれた先人たちに感謝です。



11月17日(金)から23日(木)まで、福井市美術館で行われた市国際交流作品展。その美術館の入り口のエントランスに飾られたのが、本校2年生の立体作品「スイミー」(写真)です。2年生の国語の教科書に掲載されている、レオ・レオニー作「スイミー」の物語を学習した子どもたちが、想像豊かに海の中を表現した作品です。「にじ色のゼリーのようなクラゲ」「水中ブルドーザーのようないせえび」「顔を見るころには、しっぽをわすれているほど長いうなぎ」などなど。見ていると本当にスイミーの世界の中に入っているような気分になります。大人は何かを描こうとしたり作ろうとしたりするとき、「ああでもない、こうでもない」と悩み苦しみますが、子どもたちには、そうした心の制約はありません。実に自由です。自由だからこそ、今回の立体作品の様なものを作ることができるのでしょう。子どもってすごい!

ぼくらがつくった!
～福井市国際交流作品展～

ろうとしたりするとき、「ああでもない、こうでもない」と悩み苦しみますが、子どもたちには、そうした心の制約はありません。実に自由です。自由だからこそ、今回の立体作品の様なものを作ることができるのでしょう。子どもってすごい!

最高におもしろかった! ～読書集会～

読書月間の最後を飾り、11月29日(水)に、西藤島小体育館で恒例の「読書集会」が開催されました。本校の読書ボランティアのみなさんによる、正に手作りのペープサートの劇発表会です。今年は「3びきの かわいい おおかみ」(ユージーン・トリビザス文 ヘレン・オクセンバリー絵 こだまともこ訳)の絵本をもとにしたものでした。



私たちは有名な「3びきの子ブタ」は知っていますが、それとは正反対のストーリーかな?と最初は思っていました。つまり、三匹のかわいいおおかみが作った煉瓦の家、コンクリートの家、世界で一番頑丈な家を、次々に大きな悪いブタに壊され、襲われそうになります。ところが、それからの展開が実に素敵でした。世界で一番頑丈な家よりもっと頑丈な家・・・ではなく、次に用意された家はキンセンカ、スイセン、ヒマワリ、バラ等の花でできた家でした。悪いブタは、それも壊そうと目一杯息を吸い込んだところ・・・、実に素敵な香りがブタの体中に広がっていきます。素

敵な香りによって、これまでの行動を反省し、優しいブタになっていくというお話です。なぜか「三びきの子ブタ」より「北風と太陽」を思い出しました。

読書ボランティアのみなさんは、この劇制作を今年の6月頃から開始しています。もちろん劇もすごく面白かったですが、ボランティアの皆さんの、子どもたちを楽しませたい、そして読書の素晴らしさを知ってほしいという願いが、観ているこちらまで伝わってくるようでした。心が豊かになったひとときでした。



フリートークコーナー ～いじめられている君へ～



「いじめって、どうやったらなくなるのでしょうか？」TVのコメンテーターが言っていました。いじめの構図は複雑です。とても一朝一夕に片づくものではありません。でも私たちはいじめを認めるわけにはいきません。いじめのない学校、いじめのない社会はくるのでしょうか？

そんなことを考えていたとき、TVでおなじみの「さかな君」の詩と出会いました。平成18年12月2日の朝日新聞に掲載されたものです。

いじめられている君へ

中1の時、吹奏楽部で一緒だった友人に、誰も口をきかなくなった時がありました。いぼっていた先輩が3年になったとたん無視されたこともありました。突然のことで、わけは分かりませんでした。

でも、魚の世界と似ていました。例えば、メジナは海の中で仲良く群れて泳いでいます。せまい水槽と一緒に入れたら、1匹を仲間はずれにして攻撃し始めたのです。ケガしてかわいそうで、その魚を別の水槽に入れました。すると、残ったメジナは別の1匹をいじめ始めました。

助け出しても、また次のいじめられっ子が出てきます。いじめっ子を水槽から出しても新たないじめっ子があらわれます。

広い海の中なら、こんな事はないのに、小さな世界に閉じ込めるとなぜかいじめが始まるのです。同じ場所にすみ、同じえさを食べる、同じ種類同士です。

中学時代のいじめも、小さな部活動で起きました。ぼくは、いじめる子たちに「なんで？」と聞けませんでした。

でも、仲間はずれにされた子と、よく魚釣りに行きました。学校から離れて海岸で一緒に糸をたれているだけでその子はホッとした表情になっていました。

話を聞いてあげたり、励ましたりできなかったけれど誰かが隣にいただけで安心できたのかもしれない。

ぼくは変わり者ですが、大自然の中、魚に夢中になっていたら、いやなことも忘れず。大切な友達ができる時期、小さなかごの中で、誰かをいじめたり悩んでいたとしても、楽しい思い出は残りません。

外には楽しいことがたくさんあるのに、もったいないですよ。広い空の下、広い海へ出てみましょう。

もしかすると、この詩の中にいじめをなくすための、いじめられた子をケアするための、私たちが知らなければならぬ何かがあるような気がします。「さかな君」の気持ち、大切にしたいものです。

